うつのみや 歴史民俗紀行 第13回

ふたつの粉河寺が物語る 激動の南北朝時代

宇都宮短期大学 教授 江田 郁夫

室町時代なかばの1486（文明18）年9月、京都聖護院の門跡（住職）道興（1430～1501）が宇都宮を訪れ、粉河寺に止宿した。粉河寺は、現在の本町、県総合文化センター一帯にあった広大な寺院で、明治時代に廃寺となった。粉河寺というと、まずは和歌山県紀の川市に所在する粉河寺（以下、紀伊粉河寺）が思い浮かぶ。紀伊粉河寺は西国三十三所観音第3番札所として、現在も多くの参拝者が訪れる。770（宝亀元）年に大伴孔子古の創建と伝えられる古刹で、その由来を描いた『粉河寺縁起絵巻』は、平安時代後期の優れた絵巻として国宝に指定されている。

奇しくも、紀伊粉河寺は道興が門跡をつとめる聖護院配下の修験者（山伏）たちが霊験（神仏のふしぎな力の現れ）をえるために修行する行場のひとつであり、その本尊千手観音を勧請して1382（永徳2）年に宇都宮にも粉河寺が創建されたという（『下野国誌』）。このいきさつを聞いて感激した道興は、つぎのような和歌を記した短冊を粉河寺の僧侶に与えている（『廻国雑記』）。

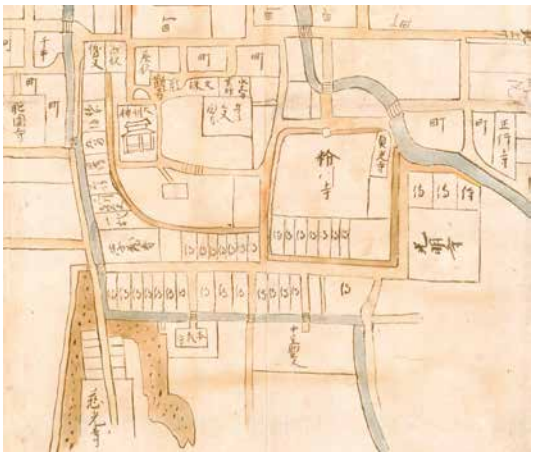
契あれや東路とをく紀の国に　あらぬこかは（粉河）の寺に宿れる（前世からの因縁か、東国からはるかに遠い紀の国にある粉河の寺に宿るとは）

道興が歌にも詠んだように、なぜ宇都宮から遠く離れた紀伊粉河寺がわざわざ勧請されたのだろうか。

粉河寺が宇都宮に創建された1382年からおよそ12年前、1370（応安3）年の紀州は戦雲に包まれていた。鎌倉幕府の滅亡後まもなくにはじまった南北朝の内乱は、約60年間にわたって日本全国を戦乱の渦に巻き込んだが、そのさいに足利尊氏（1305～58）の室町幕府が擁立する北朝に対し、南朝方は劣勢ながらも大和吉野地方や紀州などで抵抗をつづけていた。

南朝方の盛衰を描いた史書『南方紀伝』によれば、1370年に幕府の命令で宇都宮城主宇都宮氏綱（1326～70）が紀州の南朝方鎮圧に向かった。しかし、南朝方の抵抗は激しく、氏綱は同年5月に紀伊粉河寺まで一時撤退している。その後、畠山氏の援軍をえてようやく南朝方を破ったものの、7月5日に氏綱は紀州で陣没した。のちに粉河寺が宇都宮に勧請されたことからみて、氏綱は紀伊粉河寺で没したのだろう。

粉河寺が宇都宮に勧請された1382年は、ちょうど氏綱の13周忌にあたり、その法要も兼ねて氏綱の孫満綱が粉河寺を創建した。ふるさとを遠く離れた異郷の地で没した氏綱の供養のために建立された粉河寺は、壇越である宇都宮氏が1597（慶長2）年に滅亡したのちもその寺格を維持した。紀伊と宇都宮のふたつの粉河寺の存在は、戦乱の影響で各地の武将が全国規模で移動を繰り返した南北朝の内乱という激動の時代を雄弁に物語っているといえよう。



広大な粉河寺境内（栃木県立博物館蔵、「下野宇津宮図」、部分）

紀伊粉河寺の本堂（国重文）と庭園（国名勝）